

在外研修の成果

西ヨーロッパにおけるガラス生産遺跡の遺物の研究

川越俊一／平城宮跡発掘調査部

上記の研究題目のもとに平成8年10月から平成8年12月にかけて、ローマ、ヴェネツィア、パリ、ケンブリッジ、ロンドンの関係機関を訪れる。この研究は、日本と西ヨーロッパにおけるガラス生産遺跡からの出土遺物の比較研究を目的としたものである。ローマではまず、古代遺跡のスケールの大きさと遺存状態の良好さに驚かされる。ローマでは古代のローマングラスに関する資料、ヴェネツィアでは中世のヴェネツァングラスに関する資料の調査をおこなった。また、フランスでは主に近世以降のガラスについて調査した。今回の研修の主要滞在国内であるイギリスでは、ケンブリッジ大学考古博物館と大英博物館で英国内出土資料のみならず各国の出土品を調査し、世界各地のガラスおよびガラス製品の生産に関して理解を深めた。なかでも興味深かったのは、ルツボの形態である。古代の日本では、砲弾形をしたガラスルツボが用いられるのに対して、ヨーロッパ・中近東では平底ルツボが主流となること、ルツボの容量も日本が400cc以下であるのに対して、ヨーロッパ・中近東ではその10倍以上になることなどである。また、製品にしても、日本が玉類などの小型の装飾品が中心になるのに対して、一方は容器類が中心になるなど対照的な相異点があきらかになった。各機関の研究展示も芸術的な容器中心となっていたことへの物足りなさは残るが、今回の研修では各地のガラス製品にふれることができ、有意義であった。

中国前・中期旧石器文化の研究

佐川正敏／飛鳥藤原宮跡発掘調査部

日本学術振興会の推薦で、中国科学院古脊椎動物古人類研究所（黄慰文教授受け入れ）において、1996年9月1日から12月15日まで3万年前以前の前・中期旧石器文化の研究をおこなった。目下、列島最古の上高森遺跡の年代は、60万年前に迫ろうとしている。原人が列島に渡来できるチャンスは、60万年前のミンデル氷期か、100万年前のギュンツ氷期である。もし後者であれば、列島ではさらに古い遺跡が将来見つかることになる。中国の華北地方には、東谷坨遺跡や藍田原人出土の公王嶺のように、古地磁気法で100万年前を若干越える遺跡があるので、不思議ではない。しかし、世界の多くの人類学者はそれに懐疑的である。それは、原人が東アフリカで180万年前に出現し、140万年前に中東経路でユーラシアへ拡散し始めたとする仮説に矛盾する事態を、受け入れられないからである。

黄土の標準地層のある洛川に近い西安市にある中国科学院黄土・第四紀地質国家重点実験室は、年代測定機器を含む最新の設備をもつ共同利用施設で、中国内はもちろん欧米を中心とする国外の研究者も各種のプロジェクトに参加している。中国の第四紀地質学の成果は、国際的に認められているので、年代への懐疑は第四紀地質学への懐疑につながる。原人起源拡散仮説は、年代とルート、道具の内容を含めて近い将来修正されるだろう。97年度から文部省重点領域研究「日本人および日本文化の起源」（代表：尾本恵市教授）がスタートするので、成果の詳細はそこでご披露申し上げよう。